慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『唐詩帰』の詩評語について：「幽」「深」「厚」をめぐって
Sub Title	A study of the poem-criticizing terminology in Tang Sni Gui 唐詩帰
Author	高, 仁徳(Ko, In-Duck)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1991
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.59, (1991. 3) ,p.325(116)- 350(91)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大濱甫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00590001-0325

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『唐詩帰』の詩評語について

――「幽」「深」「厚」をめぐって――

高　仁徳

一、はじめに

明末に活動した竟陵派は（小論では鍾惺―一五七四～一六二五、譚元春―一五八六～一六三七―に限って取りあげる）主に「幽深孤峭」の風格で知られている。つまり、「幽深孤峭」の詩を主張して、「幽深孤峭」の詩を作ったと理解されているのである。竟陵派に対するこのような評価は『明史』文苑伝四の袁宏道伝の付伝の鍾惺条の「宏道の王・李詩の弊を矯め、倡ふるに清眞を以てするより、惺復た其の弊を矯め、變じて幽深孤峭と爲す。」という記述に依拠すると思われる。また『明史』文苑伝の鍾惺に対するこのような評価は、『明史』の編纂時期より活動時期が早かった銭謙益の鍾惺に対する評価を根拠にするものであると思われる。つまり銭謙益の『列朝詩集小伝』鍾提學惺条に「擢第の後、別に手眼を出さんと思ひ、別に深幽孤峭の宗を立て、以て古人の上に驅駕す。」と記述されているのである。結局、

銭謙益の鍾惺に対する評価がそのまま受けいれられ、今日まで広く通用しているのである。では鍾惺が「深幽孤峭」の宗を立てたとする銭謙益の評価は、はたして妥当だろうか。鍾惺が作った、詩作品の風格について論ずるのはしばらく置いて、鍾惺の主張した詩の風格について論ずるとすれば、銭謙益の評価はかなり根拠があるけれども、鍾惺の詩論の全貌を表わしてはいないと思われる。たしかに鍾惺は、直接彼の文集の中で「深幽孤峭」の風格を主張はしていないものの、譚元春と一緒に評選した『詩帰』の中で、「幽」「深」を褒める言葉として、外のどの評語よりも頻繁に使っている(「孤」「峭」は、『詩帰』も含めて、彼らの文集でも詩評語としてはあまり出現しない。銭謙益がこれらの言葉を使ったのは、鍾惺と譚元春の性格、及び彼らの詩作品に関連づけて別に説明できそうだが、小論で取り上げるのは略する)。一方、鍾惺の文集の中のいろいろな序と書牘文を読んでみれば、鍾惺が理想的な詩境として位置づけたのは、「厚」であるということが分るのである。したがって従来の文学史などで『明史』のように銭謙益の評価通り「幽深孤峭」をもって竟陵派の詩論を代弁するのはいうまでもなく、『詩帰』を参照せず、「厚」だけで竟陵派の詩論を代弁する最近の一部の研究論文も一面的だと言わざるをえない。(1) また、「幽深孤峭」と「厚」の両方に注意をはらっている文学批評史もあるが、(2) これらの風格が竟陵派にとっていかなる意味で使われたかについては、具体的説明に欠けている。もちろん中国の古典の詩文批評史において伝統的に使われて来た、一字ないし二字からできた簡単な詩評語を、客観的かつ具体的に説明するのが非常に難しいことは周知の事実である。しかし鍾惺と譚元春は彼らが心血を傾けて評選した『詩帰』の中で「幽」「深」「厚」及びその外のいくつかの評語を繰り返して使っているのである。これらの評語が反復して施されている詩句(彼らは一篇の詩全体についてもまとめて評しているが、おおむね一二句ないし三四句の詩句について評している)を分析してみれば、彼らが想定している「幽」「深」「厚」の詩境が、ある程度浮び上って来るのではないだろ

うか。小論はこういう意図の下で『唐詩帰』（『詩帰』は『古詩帰』・『唐詩帰』からできている。）に依拠し、また彼らの散文集を参考にして「幽」「深」「厚」について考察を加えたいと思う。

従来の研究の中で『唐詩帰』の中での評語を直接分析したものとしては阿部兼也氏の論文[3]があり、示唆を受けた点が少なくない。しかし阿部氏の論文では「厚」については言及されていないし、「幽」「深」についても筆者と視点が異なるところがあるのを指摘しなくてはならない。つまり阿部氏の論文では、これらの詩評語が論理的一貫性に乏しいと結論づけられているが、筆者は非常に大略ではあるが、「幽」「深」ともにそれぞれの評語が施された詩句にはなんらかの共通する特徴が見られ、そしてそれは竟陵派にとって重要な意味をもっているのではないかとの立場から、小論を進めてみたいと思う。

二、「幽」について

題辨覺精舍　儲光羲（『唐詩帰』巻七）

朝隨秋雲陰　朝　秋雲の陰に　隨ひ、
乃至青松林　乃ち　青松の林に　至る。
（「幽人」出門、毎毎如此。譚　有意無意之妙在〝乃至〟二字。鍾）
花閣空中遠　花閣　空中に　遠く、
方池岩下深　方池　岩下に　深し。

竹風亂天語　竹風　天語を　亂し、
溪響成龍吟　溪響　龍吟を　成す。
試問眞君子　試みに問う　眞君子、
游山非世心　山に游ぶこと　世心に非ず。

この詩の内容は、くもった秋の朝、家を出た詩人が松林の中にある樓閣にたどりついて、その人気のない靜かな景色の中でほっとし、真の君子がいるべきところとは世俗の間ではなく、このような山中であると自問自答しているものであると読み取れる。隠逸的趣が濃厚な作品である。二句目の後ろの譚元春の評文を見ると、「幽人」は家を出ればいつもこうであるという。「幽人」が家を出たとすれば常にたどりつくのは松林であるとの意味である。譚元春の意識の中では「幽人」と松林、あるいは山とは、深くむすびついていると言える。そしてこの詩で譚元春がいう「幽人」とは、七、八句目に見える世事には超然とし、山中に遊ぶ「真君子」とほとんど同じ意味合いで使われている思われる。

ところで鍾・譚（鍾惺と譚元春。以下同じ。）の評文には「幽人」「靜者」「真人」などがよく登場する。これらはもちろん肯定的な意味で使われている。そしてこういう人々が作った作品の風格はそれぞれ、「幽」「靜」「真」などに対応するということが前置きされている。鍾惺が『唐詩帰』巻三の中で宋之問を評して、その人なりは「躁人（さわがしい人）」であるのにその詩には「深靜幽適」の風格があるとして、「詩文故有絶不似其人者。」と珍しがっているのも、詩文はその人となりを反映するという考え方を逆説的に言っているに過ぎない。つまり以上の譚元春の評文から結論を見い出せば、「幽人」とは常に世俗には超然として山中を遊ぶ人であり、「幽人」の遊ぶ山中（あるいは山水）は「幽」

の風格と深い関係にあるということになるだろう。

また次のような例を挙げてみる。

山夜聞鍾　張説（『唐詩帰』巻四）

夜臥聞夜鍾　夜　臥して　夜鍾を聞く、
夜静山更響　夜　静かにして　山に更に響く。
霜風吹寒月　霜風は寒月に吹き、
窅窱虚中上　窅窱として　虚中に上る。
前聲既呑容　前聲　既に　呑容たり、
後聲復晃蕩　後聲　復た　晃蕩たり。
聽之如可見　之を聽くに　見るべきがごとく、
尋之定無像　之を尋ぬるに　定めて　像無し。
（耳根靈通。譚　觀音微理。鍾）
信知本際空　信に　知る、本際の空しきを
徒掛生滅想　徒に掛く　生滅の想
（鍾聲宏遠不比琴笛之類。説得幽靜、皆従山夜生出。妙、妙。鍾）

この詩では山の夜、横たわってどこからか聞こえて来る鍾声を聞き、その鍾声とほとんど一体になっているほど、限りなく澄まされている詩人の心が感じられる。最後の鍾惺の評文に注目したい。「幽静」はみんな山夜から生み出されたという。ここでは山夜そのものが「幽静」の風格を作り出すにおいて直接的に意味を持っているように思われる。しかも「皆」と強調している。このように「幽」の評価を得ている詩句は、それぞれその場面は異なるけれどもほとんどが山あるいは水を背景にしているのが指摘される。そしてその多くがまた夜を背景にしていて、「幽」の辞書的意味の通り「おくぶかくて、しずかで、くらい……」という雰囲気をかもしだしている。次にいくつかの例をあげてみる。

高燭照泉深　高燭　泉の深きを照し
（幽境。鍾）
光華溢軒楹　光華　軒楹に溢る。

（「夜宴石魚湖作」・元結・『唐詩帰』巻二十三）

夜來歸來衝虎過　夜來歸り來って　虎を衝きて過ぐ、
（幽甚。鍾）
山黑家中已眠臥　山　黑くして家中已に眠臥す。

（「夜歸」・杜甫・『唐詩帰』巻二十）

水宿仍餘照　水宿(すいしゅく)　仍(な)ほ　餘照(よしょう)、
（幽。鍾）
人煙復此亭　人煙(じんえん)　復(ま)た　此の亭(てい)

（「宿白沙驛」・杜甫・『唐詩帰』巻二十一）

以上の例からも見られる「幽」と夜の世界とのかかわりが、後、銭謙益から「其の所謂深幽孤峭なる者は、木客（山に住むばけもの）の清吟の如く、幽獨君（隠士）の冥語の如く、夢みて鼠穴に入るが如く、幻にして鬼國に之くが如し。」[4]と非難をあびる要因の一になったと思われる。今、銭評の妥当性についてはいま論じないが、夜は昼間の俗生活から離れて自分の内面世界と向い合いやすい時間であるということは言えるだろう。もちろんこれらの暗い雰囲気を有する詩句も、そのほとんどが山あるいは水を背景にしているのは、前掲の詩句と同じである。

では彼らにとって山水はどういう意味を持っているのだろうか？　鍾・譚も公安派と同じように決して少なくない山水の詩文作品を残している。量からみれば公安派よりは劣るが、彼らは山水についての獨特の理論を持っている。『唐詩帰』巻十八、杜甫の「万丈潭」についての評文の中で、鍾惺は「山水に理無しと謂ふを、吾信せざるなり。山水に理

無くんば、決して幽靈なること能はず。」と言っている。つまりは山水そのものが「幽靈」なるものであり、その理由としては、山水には理があるからだと言っている。山水と理との関係についての強調はその他の評でも見出せる。(5) そしてその山水に入る人間については「胸中〝深省〟の二字無くんば、山水、禪林の間に入るべからず。(6)」と言っている。奥妙なる哲理を含んだ「幽靈」なる山水にふさわしい人間は、鍾・譚がよく言う「精理」「至理」「靜理」などを悟ろうと、たえず「深省」する人間でなければならないのである。そして「深省」するのは、常に山に遊ぶ「幽人」の特徴である。山にくらして坐禪をくむ僧侶はまさに「幽人」に近いと言える。事実、彼らが「幽」と評した詩句の中には僧侶がよく登場する。

草堂毎多暇　草堂　毎に暇多く、
時謁山僧門　時に山僧の門を謁ぬ。
所對但群木　對ふ所はただ群木のみ、
終朝無一言　朝を終うるも一言無し。
（禪意、又是幽人眞境。鍾）

（「無盡上人東林禪居」・李頎・『唐詩帰』巻十四）

鍾惺の評文によれば禪（あるいはそれに近い境地）も、また「幽人」の真境である。そして「幽人」のもう一つの特

徴は「閑心」を保つことである。鍾惺は「頃來闕章句、但欲閑心魂。」という岑参の詩句に「大儒、幽人盡此二語。」[7]と評している。つまり「大儒」「幽人」の本質は章句解釋にとどまる読書よりも、「閑心」を保つことに尽きるのだと言っているのである。「閑心」を保たなければ「深省」することもできない。そして俗事にわずらわされる俗間では「閑心」を保つことは難しいのである。

実際、鍾惺自身は山水の中で隠居はしなかったものの、多忙な官職生活の中で「閑心」を保つために努めたらしい。譚元春の書いた「退谷先生墓志銘」[8]には、鍾惺については「性は深靖なること一泓の定水の如く、その帷を披けば氷霜を含むが如し。世の俗人と交接せず、或は時に對面して同に坐起するも、睹る者無きが若し。仕宦邀飲するに、酬酢主賓無く、相属せざるが如く、人是を以て多くこれを忌む。しかして專ら書史に積思す。」と述べられている。この文章には、鍾惺の世俗とは距離をおいた、静かで冷厳な性格がよく描写されていると言えよう。鍾惺はまた譚元春の詩集の序である「簡遠堂近詩序」[9]の中で、もともと「孤衷峭性（きびしくて、世俗と合わない心）」の持ち主である譚元春がむりやり「汎愛容衆（広く愛して、衆を受入れる）」しようとするのに対して「心跡之併」を強く忠告している。「心跡之併」とは「心」と「跡（あしあと、つまり行い。）」を一致させることである。鍾惺によれば昔から言われている名士の風流においては、必ず「門庭蕭寂、坐鮮雑賓」を言い、「心跡之併」を貴ぶのである。彼はまた同じ文章の中で「心」と「跡」が違う場合の弊害についていろいろと述べ、そういう状態は詩趣からも遠いと言っている。このような性格と考え方を持っている彼らにとって、俗世から離れている山水は特別な意味を持っているに違いない。つまり、山水はそれ自体が「幽」なるものでありまた、「真君子」「幽人」のいるべき場所としても意味があったのである。

こういう点からみると、『唐詩帰』の中で「幽」の評価を得ている詩句のほとんどが山水とかかわりを持っていると

いう事実が、彼らにとって非常に重要な意味を持っていることが理解される。そして詩そのものを「清物」であると把握し、また「逸」「淨」「幽」「澹」「曠」の詩境をもって詩の全体像を説明する鍾惺にとって[10]、「幽」は極めて重要な概念であり、あるいは山水詩は彼らの思う本質的詩に近いものであるのかもしれない。彼らの美的感覚によってなりたつ「幽」という詩境が、山水だけで完全に説明されるとは思われないが（完全に説明することはそもそも不可能に近いと思うが）、結果として山水は「幽」を説明するのに欠せない大きい手掛りになっていると言えよう。そしてそれは鍾・譚の生活及び性情を強く反映しているのである。

三、「深」について

忘機委人代　機を忘れ　委ねて人に代へ、
閉牖察天心　牖を閉づれども　天心を察す。
（深。鍾）

（「南山家園林木交映盛夏五月幽然清涼獨坐思遠率成十韻」・陳子昂・『唐詩帰』巻二）

惜此生遐遠　惜む　此の生遐遠なるを、
誰知造化心　誰か知らん　造化の心を。
（結得深。鍾）

（「滄陽峡」・張九齢・『唐詩帰』巻五）

靜求元精理　靜に元精の理を求むるに、
浩蕩難倚賴　浩蕩として倚賴し難し。
（深。鍾）

（「病柏」・杜甫・『唐詩帰』巻十九）

永懐根本妙　永く懐ふ根本の妙なるを、
誓以身心修　誓ふに身心の修むるを以てす。
（深。鍾）

（「題龍日寺西龕石壁」・嚴武・『唐詩帰』巻二十三）

ここで引用した詩句を読んですぐ気がつくのは、いずれも詩句の内容が深奥であるということである。はじめの陳子昂の詩をみれば、題名が示している通り真夏、静かで涼しい林の中にある家でひとりで幽然として思索にふけるという

趣の詩であるが、鍾惺が特に「深」であると評した詩句は、世俗的な欲念を忘れて窓から窺わなくても天意を察することができるという内容である。次の張九齢の詩句は、舟に乗って浪陽峡を通りながら、その険しい渓谷の景色を描写した詩の最後の聯であるが、ふとこれから通らなければならないおのれの人生旅程の遥かなることに憐れみを感じ、そのおのれの人生までも支配している自然の道理は誰にも分ることができないと嘆いている。次の杜甫の詩句も根元の理を静かに求めるという内容であり、嚴武の詩句もやはり根本の妙なることにふれる内容である。つまりここで引用した詩句のいずれもが宇宙を支配する根本たる原理についての関心をその内容にしているのである。これらの詩句に鍾惺が「深」と評価したことは、誰がみても納得がいくものであると思われる。

しかし彼らが「深」を施した詩句にはこれらと異なる性格を持つ一群がまた、あるのである。次に例をあげてみる。

玉階怨　李白（『唐詩帰』巻十六）

玉階生白露　玉階に白露を生じ、
夜久侵羅襪　夜は久しくして羅襪を侵す。
却下水晶簾　水晶簾を　却下して、
玲瓏望秋月　玲瓏、秋月を望む。
（一字不怨、深深。鍾）

この詩は宮中で君を待つ宮女を咏じた、いわば閨怨類に属するものである。鍾惺の評文の意味は、この詩のテーマが題名に表われている通り怨であるにもかかわらず、詩の内容には直接怨をもらしている言葉が一字もないのが「深」であるということである。つまり、「景」の描写を通じてたくみに「情」である怨を表現して、完成度の高い作品になっているとの意味である。『唐詩帰』の中にはこういうパターンの評文が実に多く見られる。必ずしも「深」の評価を得ていない詩においても、「説不出」などの評語が肯定的評価の役割をはたしている。中国の古典の詩評史において、こういう「景」の描写による「情」の表現、いわゆる「情景融合」の表現法が貴ばれたのは一般的に認められる事実であるが、この表現法は『唐詩帰』でも繰り返して強調され、その多くが「深」と評価されているのである。次にもう一首例をあげてみる。

望月懐遠　張九齢（『唐詩帰』巻五）

海上生明月　海上に明日生じ、
天涯共此時　天涯　此の時を共にす。
（情無限。鍾）
情人怨遙夜　情人　遙夜を怨み
竟夕起相思　竟夕　相思を起す。
滅燭憐光滿　燭を滅し　光滿つるを憐れみ、

（深于看月。鍾）

披衣覺露滋　衣を披るに露の滋きを覺ゆ。

下略

この詩は、月を見ながら遠くにいる情人を思うという内容であるが、第五句目の後ろの鍾惺の評に注目したい。あかりを消して、あたりに満ちた月光を憐むという第五句の内容に対して、「看月」と言うより「深」であるとの意味である。つまり題名に「望月」と、月を見るという意味がはっきり表われているのに、詩の中でまた直接的に「看月」と言うより、あかりを消して満ちた月光を憐むと間接的に言うのが、「看月」の意味を表わしながらも「深」であるというのである。ここでは「望月」あるいは「看月」という「景」を、「満ちた月光を憐む」という「情」を通じて表現することになるわけで、前掲の「玉階怨」で「情」を「景」の描写によって表現したのとは様子がすこし異なるが、やはり「情景融合」の間接的表現を貴ぶという点は同じである。

ではこういう間接的表現法に彼らが「深」と評価したのをどう説明すればいいだろうか？　その説明の前に鍾惺自ら「深」について定義をした言葉を紹介したい。鍾惺は『唐詩帰』巻二十杜甫の「送遠」という詩の末尾で「〝深甚〟なるは、解すべからざるに在らずして、人をして思わしむるに在り。若し解すべからざるを以て深きを求むれば、則はち浅し。」という。要するにただ分りにくいということだけでは「深」になれない、「深甚（深の強調形）」とは分りにくいところにあるのではなく、人にして考えさせるところにあるとの意味である。鍾惺の「深」に対するこの定義はここでの間接的表現法にもあてはまると思われる。すなわち、題名あるいは詩の前の部分などで割合にはっきりしたテーマ

を示しておいて、その後はそのテーマに直接的にかかわることは言わない。そして読者をしてその間接的表現がテーマとどういうようにかかわるかを考えさせ、やがては詩人が直接的には言わないけれども何かを言っているその「深」い思いを理解するようになるのである。そんなふうに読者をして考えさせるというその味わいが、「深」だということであろう。もちろんその時、極めてわずかな例外をのぞいて、ほとんどの場合テーマは何らかのかたちで表示されている。もしテーマについての何のヒントも施されていないとすれば、それはもはや間接表現ではない。それはただの平面的な景物描写、あるいはただの情の描写に過ぎなく、何の「深み」もないのである。だから鍾・譚は、彼らが「深」でもない部分を「深」だと評価したと誤解されるのを避けるために、前掲の「内容」の深奥な詩句に対してはただ短く「深」と評したのに対し、ここでは必ずと言っていい程どうして「深」であるかを説明するのである。それにもかかわらず後の人々から、「浅」の部分を「深」と評価したと批難されるのであるが。(11)

鍾惺の言う通り「深」が人をして考えさせることにあるとすれば、その概念の幅は極めて広くなり、鍾・譚が『唐詩帰』の中で「深」と評価した部分はほとんどがうまく説明されるようになる。つまり前掲の「深奥」な内容の詩句も結局、その「深奥」さによって読者をして考えさせるという面で共通点を持っていると言える。また次のような例もある。

但恐愁容不相識　但だ恐る、愁容　相識らざるを、
爲教恒着別時衣　爲に恒に　別時の衣を着しむる。
（可憐。譚　〃愁容〃二字、着夫婿身上便説深。鍾）

上の詩句は長く京師に留っている夫に対しての相思の情を詠じた七言古詩の最後の聯である。そしてその内容は、夫がもし帰るとすれば、夫の顔があまりにもやせこけていて見わけがつかないかも知れないから、別れた時着ていた衣服をいつも着ているようにさせようの意味である。(「愁容」の主語が怨女自身であるとして解釈することもできると思われるが、ここでは鍾惺の評文に合わせて解釈して置く。)ここで鍾惺の評は、まだ会ってもいない夫の顔を「愁容」と表現したから「深」であるという意味である。つまり「愁容」という表現には、まだ会ってはいないが平日の夫の性格からみて、まだその外のいろいろな状況からみて、夫の顔はやせこけているに違いないという、夫の身を案じる妻の深い気持ちがよく表われているのである。そしてこの詩句を読む読者も、やや唐突に見えるこの言葉が含んでいる妻の夫に対しての気持ちを読むうちに、やがっては理解するようになるのである。表現の技法にかかわる問題のように思えるが、結局この詩句は、象徴的でやや難しい表現になっていて、読者をその意味について考えさせるというような効果をもたらしていると思われる。この場合も鍾惺の言う「使人思」という「深」の意味にあてはまることになるだろう。

以上で考察した通り鍾・譚が施した「深」は、詩句の内容の「深奥」さ、「情景融合」を目指す間接的な表現法、または語彙表現の象徴性ないし含蓄性にかかわる幅広い概念になっているけれども、結局鍾惺の言う通り「使人思」の点において共通点を見い出せると結論づけていいと思われる。そしてこのように「思」を重視するのは、彼の性格とも深く結びついていると思われる。彼の「深省」することについての強調はすでに言及したが、それとは次元が異なるけれ

ども『唐詩帰』の中では「静思」「深思」などの「考えること」も強調されている。[12] そして「文天瑞詩義序」[13]の中では、古学が廃された理由として「學者不肯好學深思、畏難就易、……」と言い、文天瑞を「深沉之思」の人であると褒めている。また「周伯孔詩序」[14]の中でも、周伯孔に「精思妙悟」を勧めているが、こういう「考えること」の強調は、彼らの「学古」の主張とも関係があると思われる。つまり、古典を広く読んで深く考えることを主張したのである。そしてこのことは誰よりも鍾惺自身が実行したようである。次に前掲の譚元春の書いた「退谷先生墓志銘」の中の一節を引用してみる。

嘗に恨むらくは、世人聞見汨没し、文を守ること難破せらるるを。故に思ひを潜め覧を遐かにし、深く入りて超出し、古今の命脈を綴り、人我の眼界を開く。

「深」という評語にも、「幽」と同じく彼らの性向がよく表われていると言えよう。

四、「厚」について

舉世無相識　舉世（きょせい）　相識（そうしき）無し、
終身思舊恩　終身　舊恩を思（おも）ふ。
（悲甚、厚甚、非過時人不知。鍾）

（「寄荊州張丞相」・王維・『唐詩帰』巻九）

野老念牧童　野老　牧童を念ひ、
（厚風。鍾）
倚杖候荊扉　杖に倚りて荊扉に候す。

（「渭川田家」・王維・『唐詩帰』巻八）

日愛閭巷靜　日に愛す　閭巷靜かなるを、
毎聞官吏賢　毎に聞く、官吏賢なるを。
（厚語。鍾）

（「首冬寄河東昭徳里書事貽鄭損倉曹」・盧綸・『唐詩帰』巻二十六）

滿酌勸僮僕　酌を滿たして、僮僕に勸め
（厚在五字、不必終篇。鍾）
好隨郎馬蹄　好く隨へ　郎の馬蹄。

以上、例にあげた詩句の特徴は、いずれも人と人との関係から生じる厚い情をその内容にしている点だろう。始めの王維の詩句は、友人から受けた恩を終身思いつづけるという内容であり、やはり王維の次の詩句は村老の牧童に対する思いやりが、盧綸の詩句は町で官吏が賢いというわさを聞くという内容であるが、やはり官吏と人民との望ましい関係が表われている。朱慶餘の詩句も、旅に出る友人(?)の僮僕に満酌を勧め、その友人をよく世話してくれることを頼む内容であり、鍾惺は、「厚」はこの詩句にこそあると強調している。これらの例からは、儒家的だとも言える倫理をもとにした涵養された人格が、「厚」と評価する根拠になっていることが分る。そして一般的にその涵養された人格から発された感情は、激しさよりはおだやかさを特徴にすると言えよう。事実、鍾惺が岑参の「題貌州西楼」の中の「明主雖然棄、丹心亦未休。」に「不厚」と評したのも、[15]「棄」という露骨な表現と「丹心亦未休」から感じられる激しさを嫌ったからであると思われる。

こういう詩文においての倫理性、あるいは思想性の重視は、鍾惺の文集の中からも発見される。鍾惺は「東坡文選序」[16]の中で、戦国時代の言、すなわち縦横家・名家・法家などの文章が、蘇東坡の文章と同じく「雄博高逸之氣」・「紆回峭拔之情」を持っていながらも蘇東坡の文章より劣るのは、「先王之仁義道徳禮樂刑政」に当らないからであるという。また鍾惺はそれと同じ理由で、老荘も「出世之文」として妙であるけれども、毅然として斥けて疑わないと言い、孟子は同じく戦国の文であるが、蘇家の文の源として高く評価している。譚元春の「退谷先生墓志銘」には、鍾惺がこの「東坡文選序」を書いた年よりすこし後の四十八・九歳のころから、専ら仏教を貪読するようになったと書かれてい

るが、それはしばらくおき、ここでは儒家としての明確な自覚の上で、文章においての思想性を主張しているのは注目に値すると言えよう。

ところで「厚」の風格はこういう思想性のみを指すものではない。次に例をあげてみる。

屏居藍田　藍田(らんでん)に屏居(へいきょ)し、
薄地躬耕　薄地を躬(みづか)ら耕(たがや)す。
（厚。鍾）

（「酬諸公見過」・王維・『唐詩帰』巻八）

晩田始家食　晩田(ばんでん)　始めて家食し
餘布成我衣　餘布　我が衣を成す。
（厚甚。鍾　爲此一句不入律内、然盛唐人不拘。又）

（「贈劉藍田」・王維・『唐詩帰』巻八）

八月湖水平　八月　湖水平(たひらか)なり。

涵虚混太清　虚を涵して太清に混ず。
（多少厚。譚）

（「望洞庭湖贈張丞相」・孟浩然・『唐詩帰』巻十）

前に例をあげた「厚」と評された詩句が主に「情」を述べたのに対して、ここでの詩句は叙事、あるいは叙景をその内容にしている。はじめの王維の詩句は藍田に退いて、やせた土地ではあるけれども自ら耕すという素朴な趣であり、次の「贈劉藍田」の詩句も家で食べるのは晩生であり、税として納めた残りの布をもって家族の衣服を作るというつづまやかな田舎生活を詠じている。次の孟浩然の詩句はこれらと違って叙景であるが、やはり読む人をして平らかな気持ちにしてくれるのは同じであると言えよう。

では「情」を述べた前のグループと、ここでの詩句が同じく持っている特徴はなんだろうか？　それは結局、「厚」という詩境の本質につながるのだろうが、鍾惺によれば「朴而無態者」[17]がいわゆる「厚」であるという。「淳朴でめだたない」とでも言えるだろうか。そして鍾惺は、作った時、読んだ時は「躍然（とびあがるさま）」として目に入るけれども、その味わいが長く持たない「新奇」なるものに対して、「深厚」なるものは、作った時、読んだ時は「落然（おちぶれたさま）」として目に入らないけれども、その味わいが長く持つと言う。[18]

また「與高孩之観察」[19]の中では次のように言う。

曹能始謂へらく、弟と譚友夏との詩、清新なれども未だ痕有るを免がれずと。又言へらく、詩歸の一書、和盤託出にして、未だ盡くすを好むの累有るを免がれずと。夫所謂痕有ると盡くすを好むとは、正に厚ならざるの説なり。

ここで友人の曹能始（曹学佺）から鍾・譚の詩には「痕」があり、『詩帰』には「和盤託出」、つまり「盡くすを好む」という欠点があるという指摘を受けたことが分かる。そして鍾惺は、そのことは結局「不厚」であるということだと解釈している。「痕」があるとは、詩の中で何かを描写する時、全体の中に融け合うことができなくて、それだけが目立つということだと思われる。また「和盤託出」とは「臺盤と共に食物などを持ち出すこと。」で、何もかも打ちあけるという意味で使われるから、含蓄性と「言外之情」を重んじる詩を評価するにおいてもやはり欠点になるということである。以上で彼らの言う「厚」の概念がある程度把握されたと思う。

ところで鍾惺は、「厚」を詩の理想的詩境として位置づけている。前掲の「與高孩之觀察」の中で次のように言う。

詩、厚きに至りて餘事無し。然も古より未だ靈心無くして能く詩を爲る者有らず。厚きは靈より出づれども、靈なる者即ち厚きこと能わず。（詩至於厚而無餘事矣。然從古未有無靈心而能爲詩者。厚出於靈、而靈者不即能厚。）

「靈心」は詩を作る上において必須的な、表出せずにはいられない詩心であり、そこからさらに「厚」に至るということである。そしてその方法としては、「必保此靈心、方可讀書養気以求其厚。」[20]と言い、「讀書養氣」をあげている。

ここで注目したいのは、彼らの「厚」についての一連の発言はほとんどが『詩帰』を評選した後に出たものであると

いうことである。つまり『詩帰』を評選してまず親しい友人に読んでもらい、彼らから『詩帰』の評選態度及びその評文が「不厚」であるという意味の指摘を受けることになったのである。以上で考察して来た通り『詩帰』を評選する当時においても「厚」に対する認識があり、それを『詩帰』の中でも反映したわけであるが、「不厚」であるという指摘を受けるにつれて「厚」についての認識をあらためることになったと思われる。すなわち、彼らの「厚」についての思いには、おのれの「不厚」に対しての反省の意味が深く込められているのである。友人の曹学佺から「不厚」であるという意味の指摘を受けたことについてはすでに言及したが、高孩之からも同じ内容の手紙をもらったらしい。前掲の「與高孩之觀察」をまた引用してみる。

> 向に回示を棒讀し、諭すに惺の評する所の詩歸、厚の一字において反覆すれども、筆を下すに多く未だ厚ならざる者有るを以てするを辱す。此れ洞見深中の言なり、然も亦説有り。夫れ所謂厚の一字において反覆する者は、心に詩中實に此の境有るを知るなり。その筆を下すや未だ此の如きこと能はざる者は、則ち所謂知れども未だ蹈まず、期すれども未だ至らず、望めども未だこれを見ざるなり。

『詩帰』には「厚」という評価が繰り返されているが、その評は「厚」に欠けているということが高孩之からの手紙に書かれていたのが分かる。鍾惺はそのことを認めた後、それについて弁解している。つまり「厚」という字を反復したのは、詩の中に「厚」という詩境があるのを知っているからであり、評が「厚」ではないのは、知っているが及ばないということであるのだと言う。まことに明快な自己分析であると言わざるをえない。彼はまた自身の詩文についても

「我が輩の文字、畑火の無きを極むる處に到り、便ちこれ機鋒あり、……（畑火は飯を炊くけむり。機鋒は禅宗問答でのするどい言葉）」[21]と言い、自身の詩文が俗世間から離れていて「厚」ではないことを認めている。こういう点から見ると、鍾惺は誰よりも冷静に批評家としての自分と創作家としての自分とのギャップを見詰めていた人であると思われる。先に論じた「幽」と「深」が彼らの人間そのものに深く密着した部分から発せられたものであるとすれば、「厚」は彼らの批評家意識がもっと働いた、つまり彼らがそうであるべきと目指した理想のものであるのだと言えよう。そしてこの「厚」の認識は中国の伝統的詩観への回帰を示している。つまり、鍾惺は「陪郎草序」[22]の中で「夫詩以靜好柔厚爲教者也。」と言っているが、これはたぶん『禮記』經解篇の「其爲人也温柔敦厚詩教也」にもとづいたものであると言えよう。そして彼らが、最終的には「厚」という風格をもって伝統的詩観へ帰着したのは、中国の古典時代に生き、儒家としての軌から離れたことのない彼らにとっては、あるいは当然の結果であると言えるかも知れない。

五、終わりに

もともとごく短い説明が付いているか、あるいは何の説明も付いていない、たった一字か二字からなる詩評語の意味を、その評語が施された詩句群の分析を通じて引き出すということは、極めて難しいことかも知れない。つまりこういう場合、その評語が施された詩句から何の論理の一貫性も見つけることができないか、共通点を見つけるとしても、それは非常に幅広い概念になりやすい。しかしこういう評語がたとえ厳密さが要求される詩評語としては限界性を持っているとしても、その評者の詩についての意見を物語っているのには違いない。つまり、これらの詩評語からその評者の詩についての何らかの意見をうかがうことができるなら、それは研究の対象として充分興味あるものであると言えよ

う。

ところで『唐詩帰』の中の「幽」「深」「厚」では、すでに述べて来た通り、大略的であるけれども、鍾・譚がその評語を通じて何が言いたかったのかが、すこしは把握することができたと思われる。以下、繰り返しになるが整理してみることにする。「幽」では、鍾・譚の山水文学への傾斜がうかがわれ、またそこには世間とは距離をおいて、「閑心」を保ち、「至理」なる者を悟るためたえず「深省」する「幽人」を「真君子」として見る彼らの性情がよく反映されていると言えよう。「深」は鍾惺の言う通り「使人思」の意味で納まるが、これも「深思」して「学古」することを主張する彼の平日の生活及び性格と一致するものである。一方、中国の伝統的詩観である「温柔敦厚」にもとづいていると見られる「厚」を、彼らが意識的に持ち上げることになる大きいキッカケになったのは『詩帰』の評選であると思われる。つまり『詩帰』が「不厚」であるという友人らの批評を受けるにつれて、それを認め、反省し、「厚」について深く考えるようになったのである。そしてそこからは一儒家として「厚」を本気で自分のものにしようとする真面目さと、自身を客観的に見ることができる知性とでも言えるものが感じられるのである。

本稿は、一九九〇年度日本中国学会（十月二十日、於駒澤大学）の口頭発表をもとにまとめたものである。各途次において御教示を賜わった佐藤一郎先生はじめ諸先生方に厚く御礼申しあげます。

注

（1）紹紅「竟陵派文学理論的研究」（『文史哲学報』24期、一九七五年・台北）。陳萬益「晩明性霊文学思想研究」（国立台湾大学博士論文・一九七八年）。

（2）『中国文学批評史』（郭紹虞・上海古籍出版社・一九七九年）。『中国文学批評史』（復旦大学・上海古籍出版社・一九八一

年)。

(3) 阿部兼也「唐詩帰詩評用語試探――「説不出」と、「深」――」(『集刊東洋学』二十九号、一九七三年六月)。「詩評における逆説的表現のもつ意味について――「唐詩帰」の「静」「深」「幽」などをめぐって――」(『教養部紀要』十九号、一九七四年三月、東北大)。

(4) 『列朝詩集小伝』・丁集中・「鍾提学惺」

(5) 『唐詩帰』巻二十七・于鵠・「秦越人洞中詠」の評文。『唐詩帰』巻三・宋之問・「嵩山天門歌」の評文。

(6) 『唐詩帰』巻十八・杜甫・「游龍門奉先寺」の評文。

(7) 『唐詩帰』巻十三・岑参「緱山西峰草堂作」の評文。

(8) 『鵠灣文草』巻十二

(9) 『隠秀軒集』晁集・「簡遠堂近詩序」

(10) 『隠秀軒集』晁集・「簡遠堂近詩序」

(11) 「談芸録』一〇四頁(銭鍾書・北京中華書局・一九八四年)

(12) 『唐詩帰』巻五・張九齢「西江夜行」の評文。『唐詩帰』巻十一・王昌齢「宴南亭」の評文。

(13) 『隠秀軒集』晁集

(14) 『隠秀軒集』晁集

(15) 『唐詩帰』巻十三

(16) 『隠秀軒集』晁集

(17) 『隠秀軒集』餘集・「閲聖教序廟堂碑聖母坐位四帖」

(18) 『隠秀軒集』往集・「与譚友夏」

(19) 『隠秀軒集』往集

(20) 『隠秀軒集』往集・「与高孩之観察」

(21) 『隠秀軒集』往集・「答同年尹孔昭」

(22) 『隠秀軒集』晁集